

デンマーク人農業指導者エミール・フェンガーの 静岡時代（1963－64年）

佐保 吉一

A Danish agricultural engineer Emil Fenger
and his stay in Shizuoka (1963-64)

SAHO Yoshikazu

Abstract

A Danish farmer Emil Fenger stayed in Japan three times in his nearly 90 years of life time. The first time in Hokkaido (1923-28), the second time in Yamagata (1951-54), and the third time in Shizuoka (1963-64). His contribution to the Japanese dairy farming is enormous. This article deals with his third stay in Shizuoka and try to find out what he did and the meaning of his achievement, using the sources both written in Danish and in Japanese.

According to Fenger's biography, in 1959, there was a telephone call from a Norwegian Missionary and they asked Fenger to run an agricultural center in Japan, but this vanished in smoke. And a few years later, this time, there came a man from Danish Missionary, and asked Fenger if he could come to Japan to help farming. Finally Emil and Frida Fenger decided to take the offer although they were not provided travel expenses. They sold the livestock and farming tools and lent out the farm land.

Emil and Frida Fenger sailed to Japan via North America. They arrived at Yokohama in March 1963. But no one was there to welcome them. Fenger wrote that he was not disappointed, but his doubt of missionary's administrative ability grew. Gradually, he couldn't place his confidence in the missionary. Fenger never mentioned missionary's real name, Harry Thomsen. It seems like there were deep misunderstanding between them. In his biography he mentioned that he had some struggle whether or not writing about Shizuoka days. There are 202 pages in his biography, and he wrote about Hokkaido for 28 pages, Yamagata for 42 pages and only 13 pages for Shizuoka. These facts reveal that he did not want to write a lot about his 3rd stay.

While Fenger's 3rd stay, he visited Hokkaido and Yamagata with his wife. In Yamagata they were treated like VIP. And every month they visited Tokyo,

because there were Danish Society and friends from Ministry of Agricultural and Forestry. This means they were often away from Shizuoka. At the Scandinavian Farming Center, Fenger proposed to build an Agricultural school, which was finished after Fenger went back. According to Møller, Fenger's successor, Fenger built cowshed. And Fenger through Hokkaido connection, helped obtaining 5 milk cows. Overall Fenger's third stay in Shizuoka was not satisfactory one because of the bad relationship between Fenger and Harry Thomsen. But he built the foundation of the Farming Center. To get more clear view of Fenger's Shizuoka days we need more materials to investigate.

は し め に

2017年は日本とデンマークが修好通商条約を締結して150年という記念の年である。この150年間に両国の間では多種多様な交流が行われてきた。なかでも日本人の生活に大きな影響を与えたものの一つが酪農に関する交流である。大正時代より多くの日本人が酪農を学ぶためにデンマークに渡り、帰国後様々な機会にその経験を図書や雑誌記事等で紹介してきた¹。しかし本稿で取り上げるデンマーク人農業指導者エミール・フェンガーの事例は極めて特徴的である。国ではなく北海道という一地方が、生活も含めて酪農を全般的に学ぶためにデンマークから農業者だけでなくその家族も共に招聘している。しかも招聘時期が大正時代後期だということを考えると、この交流事業の独自性が余計に際立つのである。

デンマーク人農業指導者エミール・フェンガー Emil Fenger (1894-1983 ?², 以下、フェンガーと略) は、その約90年の長い生涯のうち3度に渡って家族と共に来日し、合計約10年を日本で酪農指導にあたった。時期的には大正末期・昭和初期(1923-28)の約5年を北海道(札幌市琴似)で過ごし、戦後の占領下末期・主権回復初期(1951-54年)に山形県(新庄市)、そして経済発展期(1963-64)には静岡県(袋井市)に滞在している。第1回滞在は北海道庁に、第2回滞在は農林省(国)に招聘され、そして第3回滞在は民間(宗教)団体に請われて自費で来日した。そのフェンガーは日本滞在中自ら農作業等に関する記事を数多く雑誌に寄稿してデンマーク農業の普及に努めている。一方でデンマークにも記事を投稿し、新聞や雑誌で日本の状況や文化を伝えている³。またデンマークに戻ってからは、多数の日本人実習生を自己の農場で受け入れている。そのフェンガーの交流実績が評価されて、1968年には明治100年を記念する叙勲も受けている。

また同じ1968年にはフェンガー夫妻の功績を讃える農業関係の賞、すなわちエミール・フェンガー賞(男性)、フリーダ・フェンガー賞(女性)が創設されている(フェンガーからの寄付金を基金としている)。これらは毎年開催される全国農業青年交換会で優秀な成績をおさめた男女に授与されてきた⁴。さらにフェンガーにちなむものとしては、第2回の山形県滞在中に住んだ住居跡が「フェンガー記念館」と名付けられて現在も山形県立新庄神室産業高等学校の敷地に残されている。加えて最近の調査で判明したことであるが、フェンガーが山形滞在中に数多くの農具をデンマーク国立博物館に送り、その一部、例えば蓑が現在も同館日本セクシ

ョンに常時展示されている。このように一個人が行なった交流としてフェンガーの事例は現在あまり知られていないが、一時は首相や農林水産大臣、国会議員もその業績を承知していたほどであり⁵、その意味では日本の酪農業に与えた影響は大きく特筆に値するものである。

上述のように日本の農業史（特に酪農史）に大きな足跡を残しているフェンガーではあるが、彼と彼の業績についての学術的な研究は少なく、またその殆どは日本側の史・資料が基になっており、デンマーク側のデンマーク語で記された史料はこれまで殆ど用いられてこなかった。さらにフェンガーに関する言説で最も多いのが、各回滞在時に関する個別的な記述・報告書である。とりわけ第1回の北海道時代を取り扱った物が多く、筆者自身も幾つかの論考を発表している⁶。第2回、第3回と回を重ねるごとにフェンガーに関する記述が減り⁷、特に第3回滞在については研究が殆ど存在しない。

以上のような状況を踏まえて、本稿ではフェンガーの第3回日本滞在である静岡時代（1963－64年）を取り上げ（図1参照）、筆者が入手したデンマーク語史料も用いながら、フェンガーが第3回日本滞在中に何を行なったのか、そしてそれがどのような意味を持つのかを明らかにしたい。

1. フェンガーと2回の日本滞在

1－1 フェンガーについて

エミール・フェンガーは、本名をカール・エミール・ハウク・フェンガー Karl Emil Hauch Fenger といい、ユトランド半島北西部のビールリング Bilring（現 Bildring）村に1894年（明治27年）5月25日に誕生した。フェンガー家は代々続く農家で、兄弟姉妹は全部で15人おり、エミール自身は下から2番目であった。兄達の中にはデンマーク農業教育史の中でも名を残しているポール・フェンガー Poul Hauch Fenger (1877-1964) がいる。ポールは伝統あるコリント農業学校



図1 静岡で農作業中のフェンガー

Korinth landbrugsskole を設立し、校長を長らく務めた人物で、人名辞典にも記載されている⁸。エミール・フェンガーはフュン島にあるリュスリング国民高等学校（ホイスコレ）で学び、最後はコペンハーゲンにある王立農業大学 Landbohøjskolen で学んでいる。彼は高等教育を受けた農学士で、卒業後は農業実践を行う傍らシェラン島北部にあるスランゲロブ農業学校 Slangerup Landbrugsskole で教員も務めていた新進気鋭の農業専門家であった。このフェンガーが1923年2月、たまたま目にした北海道での農業指導者募集に関する新聞記事が彼と日本の長い付き合いの始まりであった。

1-2 第1回日本滞在 北海道時代 (1923-27年)

フェンガーは1923年春にデンマークで行われた北海道庁による農業指導者募集に応募し、約150名の中からフェンガーを含む2名とその家族が選抜された。そしてフェンガーは早くも一家4人で1923年秋、関東大震災直後に来日した。割り当てられたのは札幌市郊外の琴似にある北海道農業試験場であった。ここで5ヘクタールの土地の提供を受け、混合農業を単独で行なった。もう一人のデンマーク人農業者はモーテン・ラーセン Morten Larsen といい、札幌の南部に位置する真駒内で15ヘクタールの農地を割り当てられていた⁹。そして2人は農閑期には道内を農業講演や指導のために回った。ラーセンは契約途中で帰国したが、フェンガーは5年契約満期の1928年6月まで勤めあげ、帰国直前の4月に開校した農学校の開設準備および初期教育にも尽力した。このフェンガーの北海道時代については、浅田英祺『デンマークモデル』や北海道庁内務部『外人農家概況 (第1次)』等多くの記述があるが¹⁰、その中心は日本側の資料を用いたものである。デンマーク側のデンマーク語史料を用いた研究は殆どみられない。さて、この北海道庁によるデンマーク農家招聘事業の評価であるが、公的には明確な評価がこれまでなされていない。これは公費を使用しての招聘であるため、失敗であったというようなマイナスの評価は下しにくいことが背景にあるのかもしれない。その一方で私的には様々な評価が存在するが、一般的に言って途中で帰国したモーテン・ラーセンに対しては厳しい。他方、帰国日でさえも働いたフェンガーとフェンガーの実施した5ヘクタール混合農業に対する評価は、その人物も合わせて概ね高い。そのことがもとなり第二次世界大戦を挟んで20年以上たっても、人々の記憶に深く残っており、戦後の再招聘へと繋がるのである。

1-3 第2回日本滞在 山形時代 (1951-54年)

第二次大戦後の日本は食糧不足となり、栄養価の高い牛乳や乳製品を生産する酪農に期待が集まっていた。そのような背景の中でフェンガー再招聘の動きが出てくる。山形県から要請が寄せられたが、それは知事が吉田茂首相に直談判して実現したものであった。最終的には日本政府の要請により第2回の日本滞在が実現する。1951年3月にフェンガーは夫婦で来日し、農林省に雇用される形で山形県新庄に同年11月末に赴任した。新庄には「デンマーク農法指導農場」が設置され、ここでフェンガーは助手2人、事務員1人、通訳1人と共に約3町9反歩の耕地で酪農を行なった。デンマーク農法指導農場でのフェンガーの立場は、酪農すること自体(営農)が目的であった北海道時代とは異なり、雇用元が国(農林省)であり、主な担当地域が東北全体ということもあり、顧問・コンサルタントのようなものであった。

フェンガーの山形時代に関しては短期的にはフェンガー自身の総括と山形県側の総括が存在する。まずフェンガー自身は、酪農に関する研究資料が整い、その結果として酪農に関する知識が豊富になる状況下、自分が開始した事業を継続すれば「日本の酪農には前途洋々たるものがある」と述べている¹¹。一方、山形県の報告書ではデンマーク農法を圃場管理、飼養管理、経営、技術普及などに分けて、具体的に成果を記している。特に技術普及に関しては、デンマーク農法の利点や実際に応用が出来ない点が詳細に述べられている¹²。また長期的にみるとフェンガーの業績は次のように評価出来る。

まず、フェンガーの繁牧技術等農業技術に關しての業績、當時はそれまで積極的に考えられていなかった牧野開拓に關する業績、そしてそれまで珍しかった農業試験場同士の協力を生んだ業績は、形として目に見えるものであり、時代を考えれば大きく評価出来るものである。また目に見えない精神的な面では牧草（飼料作物）の大切さ¹³、労働に対する真摯な姿勢を一般の農場見学者に対してではなく、ある一定の知識を持った農業指導者、特に試験場に勤務する者や農林省の技官、そして農場のスタッフを含みフェンガーと日常的にふれ合う機会のあった人たちに対して示したことは、その後における影響の広がりを見ると、大きな意義を有している。そしてフェンガー自身も一仕事終えた満足感を持って第2回目の滞在を終えている。

フェンガーは1954年9月1日に横浜港から日本を発ち、アントワープ経由でデンマークに帰国した。だが所有農場を1955年春まで借地に出していたため、その期間を利用して彼は妻のフリーダと共にスペインとイタリアに約3ヶ月滞在して異国暮らしの疲れを癒している。またデンマーク帰国後は日本から多くの農業人が、シェラン島北部（ヒレロッズ Hillerød）にあったフェンガー農場を訪ねている。例えば日本国民高等学校の創設者加藤完治の長男、加藤弥進彦は1959年3月にフェンガーを訪問し、その時に交わした農業談を紹介している¹⁴。

2. フェンガーの第3回日本滞在（静岡県：1963-64年）

2-1 フェンガーの日本再訪問の経緯

フェンガーの『自伝』よれば、1959年にノルウェーのとあるキリスト教伝道組織から突然に電話がかかってきた。その伝道者は日本でキリスト教を布教しようと考えているが、そのためには本場北欧の酪農技術も一緒に伝える必要があり、日本人に相談すると彼らはデンマークのフェンガーに会うことを勧めたという。フェンガー自身、滞日の経験から酪農センターも含んで一体化した農村におけるキリスト教伝道の大きな可能性を電話の主に伝えたという。しかし、このキリスト教伝道組織は本部からの同意を得ることが出来ず、この計画は立ち消えとなった。そして恐らく1960年頃、今度はデンマークの伝道組織の宣教師¹⁵が突然フェンガーの農場を訪れた。彼も以前のノルウェーのキリスト教伝道組織と同様な考えをもっていたが、押しの強さは彼の方が勝っていた。説明を聞いてフェンガーが趣旨に同意していることを感じ取ったそのデンマーク人宣教師は、日本に来て農業部門を指導して欲しいとフェンガーに頼み込んだ。しかし、伝道組織には金銭的裕が無いため旅費の支給が困難であることが明らかになった。これを聞いてフェンガーは妻と話し合った上で、家畜や農具を売却して旅費を工面することにした。子供たちも既に独立し、生活に余裕がある上、キリスト教にも関わるということで信仰心のあふフェンガーは決断したのであろう¹⁶。こうして、フェンガーの3回目でも最後の日本滞在が実現するのである。

〈日本キリスト道友会〉

ここでまずフェンガーの来日を要請した宗教団体について記しておきたい。1920年代にノル

佐保吉一

ウェー人宣教師カール・ライケルト Karl Ludvig Reichelt が、キリスト教を仏教徒に宣教することを目的に、宗教団体であるクリスチャン・ミッション・オブ・ブuddhist Christian Mission of Buddhist (ノルウェー語: Den Kristne Buddhistmisjon) を香港に設立した¹⁷。そしてその布教の中心を道風山 Tao Fong Shan に置き、対話を基とする活動を始めた¹⁸。その組織から日本へ宣教師として派遣されたのがデンマーク人のハリー・トムセン Harry Thomsen (1928-2008) であった。彼は妻のイーネ・マリエ Ene Marie (1931-) と共に1950年代後半京都にやってきて、最初は修学院を中心に布教活動を始めた。しかし、香港の道風山に相当する拠点を是非設立したいと願うようになり、適地を探すために日本全国を回り、東京と大阪の間にある静岡県袋井市の山あいの土地を見つけた。トムセンは拠点を新霊山 Shin Rei San と名付け、上部組織の許可を得た上で、1962年より本格的な土地の売買交渉を始めた。周囲が農家ということもあり、布教を進展させるためにデンマーク式農業を行う酪農場、さらには寝食を共にして酪農技術を学ぶ農学校も合わせて建設することになる¹⁹。この農場の酪農指導者として、日本での農業指導経験が豊富なフェンガーに白羽の矢が立ったのである。1962年には土地取得を開始し、約50ha の丘陵地を入手している。

本格的な布教活動の始めとしてまず、1964年には、宗教法人「日本キリスト道友会」が静岡県袋井市山崎に設立され、静岡県に登記された。設立決議録(昭和39年6月1日付)には、出席者としてハリー・トムセンの他フェンガーの名前も記載されている(図3参照)。以来地元では、その所有地や宗教法人が「デンマーク牧場」あるいは「トムセン牧場」と呼ばれている(図2参照)。そして1965年秋、地元の土地所有者から247筆を買い取って開拓した15万坪の土地に、スカンジナビア酪農センターと、最新の酪農技術を学ぶ付属農学校が建設され、特徴ある布教が本格的に開始されるのである²⁰。



図2 1970年頃のデンマーク牧場全景

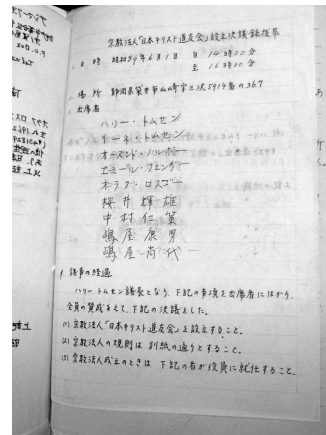


図3 日本キリスト道友会設立決議録

2-2 フェンガーの『自伝』をもとに

本節では静岡時代について唯一全般的なことが記されているフェンガーの自伝風エッセイ

『Langs med vejen（道のままに）^{21）}』（以下『自伝』と略記）を基本史料に、第3回日本滞在について、具体的にどのような滞在であったのかを明らかにする。そして次節では、フェンガーの『自伝』以外の史・資料を用いて本節のフェンガーの記述と突き合わせて考察したい。

〈到着〉

フェンガー夫妻は北アメリカやハワイにいる子供たちや友人を訪ねた後、1963年3月末に横浜港に入港した。約9年ぶりの来日であったが、港には来ているはずの迎えが現れなかった。フェンガーは「そのこと自体には失望しなかった^{22）}」と記すが、この出来事を機に全体のプロジェクトの主導者である宣教師（筆者注：ハリー・トムセン）の事務管理能力を疑うようになる。後に述べる両者のわだかまりの始まりである。トムセン側にとすると、フェンガー夫妻は住居が完成する前に早く到着しすぎたと思っているのである^{23）}。結局、フェンガー夫妻は土地売買を進めている弁護士が所有している農家に住ませてもらうことになった。『自伝』ではこの後、この日本での最後の滞在について自伝に書くべきかどうか迷ったことが記され、プロジェクト全体が宣教師（トムセン）の能力を超えていたと批判的に述べている。その後トムセンの農地取得について詳細に記し、日本の農村の状況を知っている立場から、フェンガーはトムセンの土地取得の方法を批判している。ただ、注目すべきは、フェンガーは決してハリー・トムセンの本名は出さず、ただ「宣教師 missionær」と述べていることである。フェンガーの相手に対する深い配慮を感じざるをえない。

〈北海道・山形再訪〉

日本に到着してまもなく、恐らく住居が完成する7月までの間を利用してフェンガー夫妻は40年ぶりに北海道を訪問している。40年間における同地での農業発展にいたく感銘を受けている。また到着後しばらくして今度は山形県知事からの招待を受けて2週間の日程で山形を訪問している。もちろん以前居住した新庄市の農場も訪問している。フェンガーが一番感銘を受けたのは、以前提案した牧野開拓が進んでいることであった。「以前は何百ヘクタールという草深かった土地が、今や牧草が生え乳牛の母屋になっている^{24）}」とその思いを記している。山形滞在中フェンガー夫妻は完全な賓客扱いを受け、立派な温泉旅館に宿泊し歓待を受けている。デンマーク牧場における扱いとの差にフェンガー夫妻が驚いたことは想像に難くない。

〈日常生活〉

先述のようにフェンガー夫妻はハリー・トムセンが想定していたよりも早く日本に到着したため、住居の準備が整っていなかった。そこで最初の6ヶ月は土地売買交渉人の持ち家である農家に居住していた。そして1963年9月に完成したばかりの新居（5LDK）に引っ越した（図4）。家具こそ中古であったが、台所は当時の日本としては珍しく電気が引かれていたし、湯も出た。5部屋の内1部屋が和室で後は洋室であった。

デンマーク牧場は最寄りの袋井駅からは南に約10キ



図4 フェンガーの住んでいた住居

口離れており、周囲には商店も無かった。そこでフェンガー夫妻は週に1度はタクシーを用いて町まで買い出しに出かけている。『自伝』では「いつも草ぼうぼうの土地がどのような農地になるのか楽しみに外の景色を見ていた²⁵」と記されている。また衛生上の理由から月に一度は袋井市から係員が来て便所に DDT を撒布したとも書かれている。

フェンガーは妻フリーダの日常についても記している。彼女は日本家屋の掃除にはそれ程時間を要さないため自由な時間を持つことが出来た。その時間を利用し川沿いに長距離の散歩に出かけたりしていたが、もう少し何か人の役に立つことをしたいと願い、得意な英語を生かすことを考えた²⁶。即ち、近所の女子高生に無料で英会話を教えることにしたのである。まず高校に行って趣旨を説明し、反応を待ったところ、一人の生徒から連絡があり、フリーダは彼女に約半年間英会話を教えている。また、英語に関しては農場助手の青砥とニシカワ、そして嶋屋夫人もフリーダから英語を習うために、週2回フェンガー家でレッスンを受けている。レッスンの終わり頃には嶋屋康男も赤ん坊を連れて現れ、しばし楽しいお茶の時間となったことが『自伝』に記されている²⁷。

3回目の日本滞在は、以前の2度の滞在と比較して、そこに居ることを強制されてはいなかった。以前は公的機関が費用を出した公的な滞在であったからであろう。そのため静岡滞在中、フェンガー夫妻は月に1度程度、数日の予定で東京に出かけてデンマーク＝日本協会の行事に参加したり、農林省の旧友たちと会って旧交を温めている。特に農林省の友人たちとの交流を通じて、静岡の新しい農場のことを紹介し、協力を要請していた²⁸。その成果としてまず挙げられるのがデンマーク赤牛の導入である。デンマークから日本への動物を持ち込むことは贈り物でないと認められないという情報を農林省の役人から得たフェンガーは、その情報を基に事を進めた。そしてそれが実現するのは後任者のムラーの時であった。こうして最終的には、17頭のデンマーク赤牛（乳牛）をデンマークから贈られるという栄誉を日本キリスト道友会が得たのである。そのお膳立てをフェンガーが過去に築いた人脈で行ったのであった。

〈農場・酪農関係〉

デンマーク牧場内の農作業の関係では、まず助手兼通訳で嶋屋康男がいた。1963年秋に着任し、フェンガーは彼に農業関係の会計を任せるようにした。嶋屋は同社大学出身で学生時代からハリー・トムセンと付き合いがあり、トムセンの元で洗礼を受け、トムセンと日本中を回って新霊山の適地を探した仲でもあった。さらに日本キリスト道友会の役員でもあった。その妻が尚代で、二人の間には誕生したばかりの女儿がいた。嶋屋夫妻の住居がフェンガーの隣であったため、両者の間では頻繁な交流があったようである。嶋屋夫妻に用事がある際にはフェンガー夫妻が子守をしている仲であった。

このほかの農業助手としては酪農学園から青砥好夫²⁹、そしてニシカワがいた。青砥はフェンガーの北海道時代からの知古で酪農学園教授の中曽根徳二の門下生でもあった。中曽根はフェンガーの北海道時代、フェンガー農場で実習したことがあり、さらにデンマークでもフェンガーの農場で実習をしているほど、フェンガーとは密接な関係にあった。

その中曽根との関係のなかでフェンガーは、1963年末に北海道の中曽根に乳牛5頭の購入を

依頼した。当時乳牛の価格は北海道が最も安価であったからである。中曽根からは1月初旬に、5頭の乳牛を購入したとの連絡がフェンガーに届いている。支払いは全部で約2万クロネであった。なお、この送金に際して様々なトラブルがあり、フェンガーはそのことを『自伝』の中で詳しく述べている³⁰。また中曽根の方からもデンマーク農業を体験させるためにフェンガーの元に6週間の予定で北海道から実習生を派遣している。そしてその6週間はフェンガーにとっても楽しく有意義な期間であったことが『自伝』から読み取れる³¹。

1964年7月にオーストラリアから15頭の牛が到着したこともデンマーク牧場にとっては一大事であった。当時はトラックが無かったため、袋井駅から行列を組んで徒歩で運んだ。これを見た村人は驚いたというエピソードが残っている³²。フェンガーによれば、未經産雌牛なので荒々しく、あまり言うことを聞かず大変であったらしい。しかし、牛たちは集団で動く習性があることを知っているフェンガーは、牧童がよく使う古いトリックを用いて3週間ほどで牛と仲良くなったと述べている。このような酪農に関係するフェンガーの筆致は実に軽快である。

2-3 フェンガーの『自伝』以外の史料をもとに

まず最近入手した資料を紹介したい。フェンガーが滞在したデンマーク農場のミッションリー、ハリー・トムセンの妻、イーネ・マリエ・トムセン Ene Marie Thomsen (1931-)へのインタビューもとにした論考である³³。彼女は夫の影響か、「フェンガー夫妻は早く来日し過ぎた。住居の準備が出来る前に来てしまった³⁴」と少々非難するように述べている。また、フェンガーは以前日本に滞在したにも関わらず、農民の自宅に土足で上がってくという苦情が寄せられていることも述べている。さらに、静岡（袋井）ではフェンガーがあれこれ様々な要求をし過ぎたこと、そのために夫のハリーは農業会計を新霊山の会計から分離し、日常の会計管理を財務担当のオーラフ・ロースゴー Olaf Roesgaard³⁵に任せることになった³⁶」ことを述べている。全体的にはトムセン夫妻がフェンガーに対して余り好ましい印象を持っていなかったことがよく分かる。

また、フェンガーの後任者である、ムラー Kristian Møller がその著書の中でほんの僅かであるがフェンガーが牧場で行なったことを次のように記している。フェンガーは「デンマーク風の立派な牛舎とサイレージ貯蔵庫を築いた byggede en udmærket kostald efter dansk mønster og ensilagebeholder³⁷」。また未開墾地の開墾を始めたとも述べている。そして、同書の違う部分でも「エミール・フェンガーは前述のように立派な牛舎を築いた Emil Fenger byggede som nævnt en udmærket kostald.³⁸」と繰り返し述べてフェンガーの仕事を評価している。この牛舎が基本的には2017年の大改修まで維持されており、酪農方面におけるフェンガーの貢献がうかがえる。

さらにもう一つの資料は、フェンガーが静岡に滞在していた当時、同じデンマーク牧場に滞在していたデンマーク人宣教師オーラフ・ロースゴーの家族内の記録である。娘のマリエ・ロースゴー Marie H. Roesgaardさんから筆者が受け取った私信メールにフェンガーのことが述べられている³⁹。そこからは、マリエさん自体デンマーク牧場で育ちフェンガー夫妻から人形などをもらって可愛がってもらったことが分かる。その家族記録によるとフェンガーとトムセ

ンの間には「冷たい空気 kold luft」があったという。フェンガー自身の記述やイーネ・マリエ・トムセンのインタビュー、そしてこのロースゴー家の記録から、フェンガーとトムセンの関係は険悪であったことが判明する。

以上みたフェンガーの『自伝』以外の史料からは、フェンガーとトムセンの関係が確認でき、そして農業面ではフェンガーが牛舎やサイレージ貯蔵庫を建築した業績が新たに分かるのである。

2-4 帰国

過去2回の滞在とは異なり、今回は私費で滞在しているためフェンガーは、トムセンとの関係の悪さもあり、帰国に際する歓送会は無いらしいと思いこんでいたが、周りの同僚や手伝いの青年達が企画してささやかな歓送会が催された。さらに農業助手たちが駅まで見送りに駆けつけている。これら思いがけないことがよほど心に残ったのであろうか、フェンガーはそのことを詳しく『自伝』に記している⁴⁰。

また帰国に際しては静岡から一度上京して東京に滞在するのではなく、帰国時の船が出航する横浜に約2週間滞在している。このことを聞き及んで農林省の旧知のメンバーが急遽、フェンガー夫妻のために歓送会を開催した。全く急なことであったが、全国から15人ほどが駆けつけている。フェンガーはいたく感激したことを『自伝』に記している⁴¹。また同省の近藤毅夫は、わざわざ出航前に来て、最後の万歳三唱をしてくれたとも記されている⁴²。日常生活の場であったデンマーク牧場ではハリー・トムセンを始め伝道関係者とは疎遠であったため、この農林省関係者の計らいにフェンガーは感激したのであろう。記録によると東京オリンピックが終わった1964年11月にフェンガー夫妻はデンマークに向けて横浜港を後にしている⁴³。

フェンガーの今回の日本滞在はこれまでで最も短く、約1年半であった。これが予定通りであったのか、あるいはトムセンとの関係が悪化したため急遽帰国が決定したものなのか、現時点では不明である。

2-5 静岡時代のフェンガーが残したもの

フェンガーの今回の滞在期間は約1年半と短い上に、滞在先での人間関係が良好ではなかったため、彼の明確な業績を明らかにして評価するのは難しい。そこで視点を変えて、彼が静岡時代に行ったことがどのような意味を持つのかを考えてみたい。結論的に言えることは、次の時代、次に来る者の為の下地を作ったことである。まず、同じ農業専門家であるムラーが「立派だ」と評価する牛舎（図5）やサイレージ貯蔵庫を建築して、現在まで続くデンマーク牧場の基礎を築いている。自分の北海道時代からの人脈を用いて、北海道の中曽根徳二から乳牛を入手したり、スカンジナビア農学校の講師に同じく北海道時代から旧知である出納陽一が招聘されている。そ



図5 フェンガーが関わった当時の牛舎

して農林省の友人たちと交流するなかで、静岡のデンマーク牧場を宣伝し、牧場を運営する中で不明な点を確認している。特に検疫等の関係で、牛の輸入は難しかったが、贈り物ということであれば可能だということも、農林省の友人から聞いて、それを実行し、デンマーク赤牛の導入が実現したのである。目に見えないところで監督官庁の農林省と接触してデンマーク牧場への便宜を図っていたのである。このようにフェンガーは、牛や牧場の基礎である牛舎、サイレージ貯蔵を準備して、来る時代の準備をしたのである。

お わ り に

以上見てきたように、デンマーク人農業指導者エミール・フェンガーの静岡時代は依然史・資料が不足しているため、その全貌はまだ明らかではない。ただ、フェンガー自身の『自伝』の記述や第3者の資料から、初めてフェンガーの静岡時代が一部ではあるが本稿で明らかになった。特にフェンガーとデンマーク牧場（新霊山）プロジェクトの総責任者であるハリー・トムセンの関係が険悪であったことは、フェンガーの『自伝』の記述、トムセンの妻イーネ・マリエへのインタビュー、ロースゴー家の記録から確定できる。両者の関係悪化の背景には、トムセンが農業（酪農）に関して全くの素人であったことが挙げられる⁴⁴。それゆえ、専門家のフェンガーに過度に期待しすぎる面と、農業に必要な物品の要望に苛立つ面がみられたのであろう。そしてこの関係の悪さがフェンガーの帰国に繋がったのかどうかは今後の課題である。一方で、フェンガーは置かれた立場をよく認識して、牛舎やサイレージ貯蔵庫を建築したり、乳牛を導入したり、牧場の発展の基礎を黙々と築いている。農学校については、北海道から来た講師（例えば出納陽一）はフェンガーの人脈からであろう。目立たないところで着実に次の時代、次に来る者への準備をしていたのである。

最後に帰国後のフェンガーについて記しておきたい。1964年末にデンマークに帰国したフェンガーは、暫くして所有農地を貸し出し、1965年の夏には伝統あるアスコウ・ホイスコレに夫婦で滞在している。この後、高齢のため農作業が思うように出来なくなったため、農地を売却して悠々自適の生活に入る。しかし、日本との交流が途絶えたわけではない。デンマーク牧場の後任者で初代農学校長ムラーとは連絡を取っていたようで、生徒募集に苦労している様子も承知している⁴⁵。

そして既述のように、1968年にはフェンガーからの寄付金2万クローネが基となり、酪農関係の賞すなわちエミール・フェンガー賞（男性）及びフリーダ・フェンガー賞（女性）が創設されている⁴⁶。長年苦勞を共にして支えてくれた妻の名前が冠された賞の創設にフェンガーは殊の外喜んでゐる。さらに1968年末のクリスマスには、思いがけない叙勲の吉報を電報で受け取っている。加えて以前と同様、日本からも様々な人物がフェンガー家を訪問している。フェンガーの『自伝』によれば例えば黒澤西蔵、山形県知事、農林省の三宅局長、皇族では寛仁親王がいる⁴⁷。



図6 フェンガー賞の銀杯

この第3回日本滞在以降、「もう大きな世界に出ていこうとは思わなくなった⁴⁸」とフェンガーは述べている。世界の素晴らしい景色を見たけれど、やはりデンマークの美しい自然が一番だとしている。デンマークでゆっくり余生を送ることを決意しているのであった。そして晩年は機会があるごとに時事講演会などにも出かけ、特に発展途上国のことに関心を持っていることが『自伝』から伺える⁴⁹。ホイスコーレで学んだ「人生の啓蒙」が高齢になっても続いているのである。そして日本側の資料では、1983年にフェンガー夫妻が亡くなっている⁵⁰。

今後の課題であるが、フェンガーと連絡を取り、最終的な指示をしていた宗教団体「クリスチャン・ミッション・オブ・ブッディスト（現アレオパゴス、本部オスロ）」にはおそらく書簡や報告書が保管されていると思われるため、まずその資料調査を実施したい。また日本でフェンガーと関係のあった農林省、デンマーク大使館等の資料調査も行う必要がある。さらにフェンガーはこれまでの調査で日記を付けていたことが判明している。今後この日記記述を用いることが出来るならば、自伝のように遠い過去のことを回想したものではないため、書き留めた時点のフェンガーの気持ちや考えをくみ取ることが出来るだろう。

2023年にはフェンガー来日100周年を迎える。それに向けてフェンガーの日本滞在に関するさらなる総合的な研究が求められる。そのために最も史・資料が不足している静岡時代について、早急に新たな資料を見つけ出し、事実を記録化することが急務である。

[付記]

新霊山教会所蔵の資料の閲覧と写真撮影に関して便宜を図っていただいた後藤由起牧師（当時）にお礼申し上げます。またフェンガー賞のシルバーカップの写真提供を頂いた全国農業青年クラブ連絡協議会 森安 晃司副会長にこの場を借りてお礼申し上げます。さらに本稿は東海大学文学部の学部研究費による研究成果の一部です。記して感謝致します。なお、本研究を進めるなかで、東海大学の創立者松前重義博士がデンマーク牧場を訪問した際の貴重な写真を発見しました（図7）。詳しい経緯は現在調査中です⁵¹。



図7 デンマーク牧場を訪問中の松前重義博士（右）とトムセン（中央）

註

¹ 例えば北海道畜牛研究会（編）『丁抹の農業』北海道畜牛研究会，1924年。山田勝伴『農業の丁抹』東京昇文堂，1928年。大橋清蔵『丁抹の農村視察記』島根県農会，1929年他。

² エミール・フェンガーの没年についてはデンマーク側の資料では現時点で未確認である。新庄農業学校の学校司書であった信夫百合子さんが在デンマーク日本大使館に調査を依頼した結果では、夫妻とも昭和58年に死亡したとのことである。留場俊充「デンマーク農場50年の検証

—E・フェンガーのやろうとしたもの・残したもの—」『北村山の歴史』第3号, 2001年5月, 36頁。

³ 例えば以下のものがある。Emil Fenger: 'Lidt om Landbruget i Japan', "Vort landbrug", Nr. 43, 1924, s.23. Emil Fenger: 'Mulighederne for at afsætte danske Frø i Japan', "Dansk frøavl" Årg. 36, 1953, ss. 249-50.

⁴ これらの賞は, 財政的な理由から2013年の第35回大会が授与の最後になっている。

⁵ 例えば以下のものがある。第48回国会 内閣委員会 第25号 (1965年4月1日 (木曜日) 午前10時39分開議 (稲村隆一議員の質問・発言))

⁶ 拙稿「大正時代北海道招聘デンマーク農家に関する一考察 (前) —エミール・フェンガーの書簡を中心に—」『北海道東海大学芸術工学部紀要』第29号, 2006年, 15-22頁, 及び「大正時代北海道招聘デンマーク農家に関する一考察 (後) —エミール・フェンガーの書簡を中心に—」『東海大学国際文化学部紀要』第5号, 2012年, 91-112頁。

⁷ 第2回の山形時代については拙稿「デンマーク人農業指導者 エミール・フェンガーの山形時代 (1951-54年)」『東海大学国際文化学部紀要』第6号, 2013年, 27-56頁を参照。

⁸ Povl Engelstoft (red.): Dansk Biografisk Leksikon, Bind VI, København, 1935, s. 647.

⁹ ラーセン農場はフェンガーの農場の3倍もの広さがあるため, 他にもう1人のデンマーク人農業助手ペーダ・スナゴーが配置されている。

¹⁰ 浅田英祺『デンマークモデル』北海道デンマーク会, 1991年。北海道庁内務部『外人農家概況 (第1次) 1924年, 北海道庁産業部『外人農家概況 (第2次) 1927年等。

¹¹ 原文はタイプ打ちで4頁。タイトルは“A short report on 2 years work in Japan.”現在は「フェンガー記念館 (山形県新庄神室産業高校)」内のフェンガー関係資料の中に収められている。

¹² 特別報告第6号『デンマーク農法指導農場業務報告』山形県立農業試験場, 1957年11月。

¹³ 「・・・(フェンガーは) 牧草は立派な作物であることを教えてくれた。よく肥培管理し十分な収穫利用することも農業者 (酪農家) に大きな刺激となった」。「デンマーク農法指導農場 —デンマーク農場・フェンガー博士に学ぶもの—」『山形県地域開発史』1993年3月, 164頁。

¹⁴ 加藤弥彦『志を継いで ～私の愛農人生～』農村報知新聞社, 1997年, 152-53頁参照。

¹⁵ おそらく後述するハリー・トムセンのことだと思われる。

¹⁶ フェンガーは宗教団体クリスチャン・ミッション・オブ・ブッディストが旅費を工面できないため, 費用を捻出して自費で赴任したが, 宗教団体の方ではフェンガーが「自発的に volunteered」あるいは自ら援助を「申し出る offered」と思っている節がある。この両者間の考え方の差が, 後の不和に繋がった要因の一つであろう。Christian M. Hermansen: 'Ene Marie Thomsen: Her Missionary Years in Japan 1955-1966', 『関西学院大学キリスト教と文化研究』第17号, 2015年, 136頁及び Christian M. Hermansen: 'Danish mission in Japan - the beginnings' 『関西学院大学キリスト教と文化研究』第13号, 2011年, 87頁参照。

¹⁷ クリスチャン・ミッション・オブ・ブッディスト及び日本キリスト道友会 (新霊山) については次のものを参照。Christian M. Hermansen: 'Danish mission in Japan - the beginnings', 79-105頁 (特に82-89頁)。

¹⁸ 現在この宗教団体は改名してアレオパゴス Areopagos と呼ばれている。
Cf. <http://www.areopagos.no/index.php/om-areopagos/hvem-er-vi/historien>

¹⁹ 当時のクリスチャン・ミッション・オブ・ブッディストの活動は都市部が中心であったが, トムセンは日本の人口の半分近くが田園地帯に居住しており, 農民を布教のターゲットにしようと考えた。彼自身農業経験は無いが, 布教をより進展させるために農民が興味を示しそうなデンマーク農業 (酪農) を実践する農場を備えた農業センター, そしてフェンガーが提案した農学校, さらに異なる宗教を持つ者が集まる場としてのブラザーホームを建設しようと計画した。

²⁰ しかし当時, 日本の酪農は不振で思うほど生徒が集まらなかった。やがて農学校は北欧からの

資金も途絶え、閉鎖される。その後、フリースクールとして、不登校や引きこもりを抱える子どもたちを対象とした共同生活寮「デンマーク牧場こどもの家」と形を変えて存続した。また法人の運営も北欧から派遣される宣教師陣から日本人の手に託され、1985年には日本福音ルーテル教会との法人合同が実施された。そして2003年には、社会福祉法人「デンマーク牧場福祉会」が創設された。2009年現在では特別養護老人ホーム・ディアコニア、児童養護施設・まきばの家、青少年自立援助ホーム・こどもの家、精神科診療所・こひつじ診療所を開設し、この土地において、教育・福祉・宣教の取り組みが進められてきている。そして2009年、新霊山教会が献堂40年を迎え、記念誌が発行された。日本キリスト道友会『新霊山教会 献堂40周年記念誌』2009年。

²¹ Emil Fenger: “Langs med vejen (道のまに)”, København (Nyt Nordisk Forlag), 1970. この本はフェンガーが76歳の時に出版されたものである。全202頁で、表紙絵は日本農民の姿である。第1回日本滞在には27頁、第2回滞在には42頁、第3回滞在には12頁の合計約80頁が費やされている。これは全体の約40パーセントである。日本滞在の中では第2回に関する記述が最も多く、静岡時代が最も少ない。

²² 『自伝』, 181頁。

²³ Christian M. Hermansen: ‘Ene Marie Thomsen: Her Missionary Years in Japan 1955-1966’, 130頁。フェンガーの『自伝 (181頁)』によれば、1962年(フェンガーのアメリカ滞在時)には何度か伝道組織とやりとりをしている。その際に住居や来日の時期について何らかのやりとりがあったはずだと思われる。

²⁴ 『自伝』, 184頁。

²⁵ 同上, 183頁。

²⁶ フリーダは若い時に英国留学の経験があり、英会話はフェンガーよりも得意であった。この英会話を通じて彼女なりの交流をしているのである。なお、フリーダは山形時代にも英会話を教えていた。拙稿「デンマーク人農業指導者 エミール・フェンガーの山形時代 (1951-54年)」36頁。

²⁷ 『自伝』, 189頁。

²⁸ 日本キリスト道友会が始めることを約束した農業センターに関しては、農林省も興味を持っており、同省の役人もよく見学にきていた。『自伝』に度々登場する近藤毅夫(山形時代の通訳)も訪問している。『自伝』, 186頁。

²⁹ 後年牧師となって北海道の釧路教会等に赴任している。

³⁰ 『自伝』, 186頁。

³¹ フェンガーは北海道時代から続く恒例の夕方の散歩時に、酪農学園大学の実習生達が歌う賛美歌を聞いて、感激している。『自伝』, 189-190頁。

³² 日本キリスト道友会『新霊山教会 献堂40周年記念誌』2009年, 33頁。

³³ Christian M. Hermansen: ‘Ene Marie Thomsen: Her Missionary Years in Japan 1955-1966’, 121-143頁。Hermansenの質問をEne Marie Thomsenの次男が代わってEne Marieにインタビュー形式で行なうという形を取っている。

³⁴ 同上, 130頁。

³⁵ オーラフ・ロースゴーと妻のマルタ Martha は1963-64年, 1971-74年にデンマーク牧場(新霊山)に滞在している。2人の娘がマリエ Marie である。

³⁶ Christian M. Hermansen: ‘Ene Marie Thomsen: Her Missionary Years in Japan 1955-1966’, 131頁。

³⁷ K. Møller: “Sælsomt slynges de tråde”, Herning, 1974, s. 198.

³⁸ Ibid, s.209.

³⁹ 2017年3月27日受信。

- ⁴⁰ 『自伝』, 190-91頁.
- ⁴¹ 『自伝』, 191頁.
- ⁴² 『自伝』, 191頁.
- ⁴³ Christian M. Hermansen: 'Ene Marie Thomsen: Her Missionary Years in Japan 1955-1966', 136頁.
- ⁴⁴ そもそも新霊山プロジェクト自体が無謀であったという考え方もある. Christian M. Hermansen: 'Danish mission in Japan - the beginnings', 89頁. フェンガーの考えもこれに近い. 『自伝』, 182頁.
- ⁴⁵ 初年度に3人, 次年度は9人であった. Christian M. Hermansen: 'Danish mission in Japan - the beginnings', 88頁.
- ⁴⁶ 受賞者には小さなデンマーク国旗が配された銀杯も授与された (65頁の図6参照).
- ⁴⁷ 『自伝』, 196頁.
- ⁴⁸ 『自伝』, 192頁.
- ⁴⁹ 『自伝』, 199-200頁.
- ⁵⁰ 注2参照.
- ⁵¹ 松前重義博士だと思われる写真が次のものにも掲載されている. Christian M. Hermansen: 'Ene Marie Thomsen: Her Missionary Years in Japan 1955-1966', 131頁.

エミール・フェンガーの静岡時代に関する年表

- ・1894年 エミール・フェンガー, デンマークのユトランド半島にあるビールリングで生まれる.
 - ・1923年~1928年 北海道庁に招聘され, 札幌市琴似の農業試験場でデンマーク農法を指導する.
 - ・1950年5月に吉田茂首相が東北遊説で山形県を訪れた際, 村山山形県知事と懇談し, 酪農振興指導者として実績のあるエミール・フェンガーの派遣について話し合う.
 - 12月 在東京デンマーク公使を通じて, フェンガーの派遣交渉が行なわれる.
 - 12月8日 フェンガーがコペンハーゲンで契約書に署名をする.
 - ・1951年3月24日 フェンガー夫妻が横浜に到着する.
 - ・1951年12月~1954年8月 フェンガーが妻と共に山形県に赴任し, 新庄のデンマーク農法モデル農場を中心に農業指導を行なう.
 - ・1954年9月1日 フェンガー夫妻はデンマーク船「コントラ号」に横浜港で乗船し, 帰国する.
-
- ・1962年: フェンガー夫妻は子供たちが住むアメリカに滞在する. ロースゴー夫妻が日本に向かう.
 - ・1963年: 新霊山の建設が始まる.
 - 3月末: フェンガー夫妻がアメリカ経由で横浜港に到着する.
 - 日本到着後, フェンガー夫妻は北海道と山形県を訪問する.
 - 7月: スカンジナビア酪農センターが着工
 - トムセンの住居が完成する
 - 9月: 新霊山教会の麓に3軒の新居 (上段=トムセン, 中段=島屋康男 (通訳), 下段=フェンガー) が全て完成し, フェンガーが引っ越す.
 - 秋: 通訳の島屋康男が着任する.
 - 年末: フェンガーが北海道の中曽根徳二に乳牛5頭の購入を依頼する.
 - ・1964年1月: 洋風牛舎が完成し, 北海道より5頭のホルスタイン乳牛を導入しての放牧が開始される.
 - 春: フェンガーは北海道の酪農学園大学より酪農研修生6名を6週間受け入れる.
 - 6月: 「日本キリスト道友会」が宗教法人としての認証を受け, 登記される.

- 7月末：鐘つき堂（水道揚水塔を兼ねる）が完成する。また同時期にオーストラリアから肉牛フェアホード15頭が到着する。
- 11月：フェンガー夫妻が横浜港からデンマークに向けて出港する。
- ・1965年2月：農学校の校長となる K. ムラーがデンマークより来日する。
- 11月：農学校が開校する。初代校長に K. ムラーが就任する。
- ・1967年11月：通訳の島屋康男が新霊山を離れる。
- ・1968年12月：フェンガーが明治維新100周年を記念する叙勲を受ける。
- ・1969年10月：礼拝堂の献堂式が行われる（新霊山教会）。
- ・1970年 フェンガーの自伝『Langs med vejen（道のまにに）』が出版される。
- 5月：宗教法人の代表役員が、H. トムセンから N.R. テレに交代する。
- ・1973年1月：宗教法人の代表役員が N.R. テレから O. ロースゴーに交代。
- 2月：宗教法人の代表役員が O. ロースゴーから O. ランデに交代。
- ・1974年：北欧の宗教団体からの資金が途切れ、農学校が閉鎖される。
- ・1983年：エミール・フェンガーが死去する（日本側の資料による）。
- ・1985年：日本キリスト道友会が日本福音ルーテル教会と合同する。
- ・2003年2月：社会福祉法人デンマーク牧場福祉会が認証され、法人登記がなされる。
- ・2009年10月：新霊山教会が献堂40周年を迎え、シンポジウムが開催されると共に記念誌が発行される（フェンガーの写真掲載）。
- ・2017年4月：デンマーク牧場の1964年に完成した牛舎の一部が大改修される。

参考文献

- ・Emil Fenger: “Langs med vejen”, København, 1970. (自伝)
- ・Christian M. Hermansen: ‘Danish mission in Japan - the beginnings’ 『関西学院大学キリスト教と文化研究』第13号, 2011年, 79-105頁。
- ・Christian M. Hermansen: ‘Ene Marie Thomsen: Her Missionary Years in Japan 1955-1966’, 『関西学院大学キリスト教と文化研究』第17号, 2015年, 121-143頁。
- ・Christian M. Hermansen: ‘Harry Thomsen and Shin Rei San: The Foundation of a Brother Home for Truth-seekers (安田雅美教授 廣瀬典生教授 退職記念号 栗林輝夫教授 追悼記念号)’ 『外国語・外国文化研究 (関西学院大学法学部)』第17号, 177-262頁, 2016年。
- ・K. Møller: “Sælsomt slynges de tråde”, Herning, 1974.
- ・『広報 ふくろい』第75号, 1963年5月。
- ・『広報 ふくろい』第79号, 1963年8月。
- ・『広報 ふくろい』第85号, 1964年1月。
- ・『広報 ふくろい』第92号, 1964年10月。
- ・佐保吉一「大正時代北海道招聘デンマーク農家に関する一考察（前）—エミール・フェンガーの書簡を中心に—」『北海道東海大学芸術工学部紀要』第29号, 2006年, 15-22頁。
- ・佐保吉一「大正時代北海道招聘デンマーク農家に関する一考察（後）—エミール・フェンガーの書簡を中心に—」『東海大学国際文化学部紀要』第5号, 2012年, 91-112頁。
- ・佐保吉一「デンマーク人農業指導者 エミール・フェンガーの山形時代（1951-54年）」『東海大学国際文化学部紀要』第6号, 2013年, 27-56頁。
- ・日本キリスト道友会『新霊山教会 献堂40周年記念誌』2009年10月。
- ・松田正幸「牛舎が新しく生まれ変わりました —その歴史を振り返る—」『みぎわ (浜松聖書集会)』第57号, 2017年, 169-173頁。